

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

明日を拓く — 成果を検証する —

8



平成30年度 第71回山口県学校美術展 推奨作品
「ゆらめき」
萩光塩学院高等学校 1年生(受賞時) 三輪 百花

■シリーズ「今どき学校・園②」

●国語科教育

山口市立大殿小学校	校長 磯村 勇
防府市立牟礼小学校	教諭 木下 教江
岩国市立岩国中学校	教諭 中山恵里加

●食育

下松市立公集小学校	栄養教諭 高橋 ゆふ
美祿市立秋芳桂花小学校	栄養教諭 能見真由子
下関市立川中西小学校	栄養教諭 来見田浩子

●幼稚園・保育園

周南市立鹿野幼稚園	園長 西村 陽子
社会福祉法人 光善会	
大内すこやか保育園	園長 柴田 真弓

■わたしの潤い

下松支部	田中佳代子
山口支部	山本 幹雄

■教職時代を偲ぶ

防府支部	西村 直記
------	-------

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：山本晃久

あなたのアクションは…

山口県教育会がすすめる
「元氣やまぐち」三つのアクション

- ◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
- ◎笑顔でつなく 安心やまぐち
- ◎ゴミ 落書きのない 美しいやまぐち

これからの国語科教育 言葉による見方・考え方を働かせる



山口市立大殿小学校
校長 磯村 勇

一 言葉をめぐる状況

「炎上」という言葉はもともと炎が上がって激しく燃える様を表す言葉ですが、最近ではSNS上の記事や意見に対して、大量の反対意見や批判が集中する状態を指す言葉としても使われています。そのことを逆手に取り、注目を浴びたいがために、意図的に「炎上」をねらった投稿をする場合もあります。こうした話を聞くと、人間の考え方や行動が、流行の言葉によって操られているかのような不安を感じます。

一方、「雨降って地固まる」という言葉があります。人間関係がうまくいかず、互いの主義主張が対立し、トラブルになる。けれどもその経験が、お互いを深く知り、自分を振り返る機会となり、以前よりも強い絆に育っていくことを表すことわざです。

ことわざは、人間が長い年月に渡って繰り返してきた体験から発見した知恵や真実を、端的に表現しています。けれども今の時代、「雨降って地固まる」を聞く機会は減ってきているように感じます。私たちの見方・考え方が、「互いの関係の難しさをどう乗り越えるか」から「どっちがより悪いかを決める」ほうに傾いているのではありませんか。対立軸や仮想敵を作っておき、自説の正当性を効果的に主張しようとする言葉が多く聞かれる昨今の状況と、何か関連があるのでしょうか。

二 新学習指導要領に示された新しい視点

さて、新学習指導要領に示された国語科の目標は、小・中学校ともに次のように示されています。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

この中で、これまでの指導要領にはなかったのが、「言葉による見方・考え方を働かせ」の部分です。言葉による見方・考え方を働かせるとはどういうことでしょうか。「小学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説」では、「児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる」と説明されています。

児童自身が、自ら「捉え直したり問い直したり」することが強調されているわけで、このことは国語科における「主体的、対話的で深い学び」につながる点です。これからの国語科の授業は、単に読んだり書いたりするだけでなく、そこで使われている言葉が、行動や心情などを、適切に表現できているかを捉え直し問い直すという姿勢が重視されるということです。教室では「なぜ、〇〇と書いたのか（△△と書かないのか）」といった課題が重みを持つてくるでしょう。

それでは、なぜ、今回の指導要領改訂に「言葉による見方・考え方を働かせ」が入ってきたのでしょうか。ここからは私見になりますが、冒頭の流行語とことわざの話に関係があると思います。

現代は、情報の量、伝わる速さ、発信者の多様性等が極限にまで発達した社会です。こうした高度に発達した情報化社会の中では、流行語によって人の行動が誘発されたり、ことわざなどに込められた人間の知恵がたやすく失われることが起こりやすくなります。

そうした時代だからこそ、対象と言葉、言葉と言葉との関係を不断に捉え直し問い直し、言葉への自覚を高めていくことが不可欠であるということなのでしょう。重い命題ではありますが、これからの国語科授業に欠かせない視点の一つだといえます。

三 こんな授業はどうだろう

勤務校では、毎年ホテルの季節になると、全校児童がホテルに関する作品を作っています。その活動の中で、六年生の児童が短歌を詠みました。

夏の夜ふと川みれば

いっせいのホテルはまるで夜空の星だ（児童作品）
次は、大内氏二十九代当主、政弘の詠んだ短歌です。ほたるかも

菊咲秋にあらねとも星をうかふる谷川の水
比喻を用いた対象はやや異なりますが、星に例えた点は共通しています。七百年を経てホテルを巡って回調するこの表現は、対象と言葉の関係を捉え直し問い直し、よききっかけになるのではないのでしょうか。

これはほんの一例ですが、国語科の授業づくりの材料は、諸処に見つかるはずです。各学校、各教室では、そうした取組がこれから本格化していきます。



一の坂川にある政弘の歌碑

理解と表現を繋いで学びの実感を



防府市立牟礼小学校

教諭 木下 教江

本校では昨年、「課題解決に向けて主体的に学び合う子どもの育成(三年次)〜自己の学びを見つめる活動を通して〜」として、国語科を中心に研究に取り組みました。

ここでは、六学年での「筆者の考えをとらえ、自分の考えと比べて書こう『自然に学ぶ暮らし』石田秀輝著(光村図書)」の実践を紹介します。

①意欲を高める課題の提示

課題意識をもって読み進めることができるように、類似の内容を扱っている『未来に生かす自然のエネルギー』山泉著(東京書籍)を提示し、『自然のエネルギーの利用』について、筆者の主張がより伝わるのはどちらか」と問いかけました。一人一人が根拠を挙げながら初読の感想を述べ合い、本文を精読する意欲を高めました。

②既習事項を活用した課題の解明

今までの説明文の読み方(段落構成、題名、事例の挙げ方、表現の工夫等)を活用し、それぞれの説明文の筆者の主張を読んでいきました。その際、理解を深めるように、構造的な板書を心がけたり、ペアやグループでの話し合いの場を必要に応じて取り入れたりしました。

③比較による分析的な読み方

筆者の論の進め方について適切に



筆者の主張を読み取る

分析する読み方を経験できるように、二つの説明文を比較し、どちらの主張がより伝わるかを話し合う場をもちました。子どもたちは、構成や表現の工夫等を根拠に挙げながら、筆者の主張に対する自分の考えを述べ合いました。

最後に、『未来のエネルギー利用』について自分の考えをまとめ交流しました。学んだことを自分の表現に生かすことで、より理解を深め、学びを実感することができました。

「深い学び」試される教師の力



岩国市立岩国中学校

教諭 中山 恵里加

「なぜだろう」「どちらがいいのだろう」こうした生徒の素朴な問い(問題意識)を大切に授業づくりし、努めている。それは自ら学ぼうとする「意欲」があれば、より深く深い考えを求めて他者と関わろうとするだろうし、一つの課題が解決できれば、より深く難しい課題に立ち向かおうとするのではないかと思うからだ。

昨年、生徒自身が学習課題を立てる活動に加え、タブレットを用いて話し合いそのものを振り返る活動を取り入れた。生徒は学習課題を自ら立てることで、言葉一つ一つに着目して文章に向かうようになったし、話し合いの流れや発言のしかたを振り返ることが、話し合いを質的に深める発言ができるようになった。

こういった活動を通して生徒たちは、「自分たちが考えた疑問を解決することがすごく楽しかったです。この授業で読み取る力がついたと思います」意見を一人一人がきちんと考えることができるようになったと思います。その意見をもとに疑問や反対意見をもって、話し合い活動がより深まり活発になっていきました」という声を聞かせてくれた。

生徒の「主体的な学び」が実現できれば、「深い学び」へと近づいていけ



タブレットを使って話し合いを振り返る

と思う。しかし「生徒まかせ」にしてはいけない。生徒の素朴な問いを学習課題まで引き上げていく際にも、話し合いを深めていく際にも、教師が生徒の「問い」や発言のどれをどのよう価値づけしていくかによって学びの質は大きく変わってしまう。「深い学び」を生むためには、これまで以上に教師の力が試されるのだと日々痛感している。生徒の言葉に対する認識を引き出し、さらにそこから生徒自身が言葉と向き合えるような授業づくりをこれからも研究し、授業者として成長したいと思う。

「つながる食育」で育てるこころとからだ



下松市立公集小学校

栄養教諭 高橋 ゆふ

本校の概要

公集小学校は、今年で創立百四十四年の歴史ある学校です。近年の都市化の進行により住宅地が増え、年々児童数が増えています。子どもたちは元気がいっぱい過ぎていますが、毎日朝食を食べる児童の減少や偏食・少食、食事マナーが身に付いていない児童の増加などの課題があり、個人差が大きい状況です。

そこで、食育目標を「食を楽しむ、望ましい食生活を実践する児童の育成」として、全校体制で推進しています。

下松市の小学校給食

下松市の小学校給食は、各学校の給食室の老朽化に伴い、平成二十八年九月から、八小学校三千五百食を調理する給食センター方式に移行しました。単独校方式では、昼前になると給食のにおいが教室に漂い、調理員さんとのふれあいを通して給食を身近に感じることができ環境が魅力的でした。一方、給食センター方式では、衛生管理が徹底した最新の設備で、パラエティに富んだ調理ができ、生きた教材として献立内容が充実してきました。また、単独校時代の調理員さんの熱い思いのこもった給食を継承できるようにと、献立年間計画に基づき、ねらいをもって献立を作成しています。また、子どもたちの食への関心が高まるように、委託業者の協力のもと、セレクト給食やラッキースターにんじん給食、家庭科で六年生が考えた献立の給食、バイキング給食などにも挑戦しています。委託

業者の調理員さんが市内の一年生全クラスを訪問し、給食センターで給食を作る様子などの話をし、子どもたちとふれあう機会もつくることができています。

つながる食育

昨年度、下松市が文部科学省の「つながる食育推進事業」を受託し、「プロジェクトK」健康で快適な食生活・食文化の継承を図る地域の力」と題した食育実践に取り組みました。栄養教諭が配置されている三小学校がモデル校でありましたが、下松市全体として食育が推進できるように、養護教諭や担任、家庭や地域、関係機関・団体等とのつながりの中で様々なことを実践しました。例えば、学級担任による指導に活用するために、市教研食育部会で食事マナーの定着のための資料を作成したり、学校保健会と連携し、食育講演会を開催したり、長期休業中に全校で生活チェックカードを実施し、家庭との連携を深めました。給食センターでは、一・二年生対象に給食時間のミニ指導用の野菜や料理の資料を作成し、全校に配付しました。

校内における食育の推進

本校では、教育活動の中で、毎日の給食時間を大切にしたいと考えています。学校と給食センターを兼務する中で栄養教諭の配置数が減り、厳しい状況ではありますが、給食時間にはできるだけ子どもたちの様子を見て回りながら、個別に声かけをしています。また、

子ども同士のつながりを大切にするために、委員会活動にも取り組んでいます。食事マナーの定着をめざして、給食委員会児童が給食時間に各クラスを巡回し、食器を手に持って良い姿勢で食べることを、感謝の気持ちでできるだけ残さず食べることを呼びかけています。

教科等における食に関する指導の中では、栄養教諭が担任と連携して関わることで効果的である場合には、授業に参画しています。昨年度は、各学年の実情に応じて、担任と一緒に学級活動に取り組んだ学年もありました。学級活動では、自己の生活の課題を見だし、解決するために話し合い、意思決定し、その目標に向かって努力することができ、食育の目標である行動変容のためには、担任と一緒に関わることでできる最適な授業と感じ、とても勉強になりました。

また、コミュニティ・スクール担当者や地域の食生活改善推進協議会との連携により、親子料理教室を開催したり、はしの持ち方指導にご協力いただいたりもしています。

心身ともに健やかな成長のために

年々忙しくなる職務の中で、食を大切に指導してくださる先生方に感謝しています。食育は栄養教諭だけで行えるものではなく、担任の先生方の力が何より重要です。また、食育の成果は一朝一夕には現れませんが、子どもたちの健やかな成長を願い、周りの人たちとのつながりを大切にしながら、今後も給食をおおしと、計画的・継続的に子どもたちと関わっていきたいと思います。



学級活動の授業を学級担任と共に行う



給食委員会の児童による給食マナーの啓発



「地域の宝」を生かした食育

美祿市立秋芳桂花小学校

栄養教諭 能見 貞山子

「いただきます！」ランチルームに響く声。全校児童と教職員が集い、給食時間が始まります。全校が皆で一緒に食べるランチルームでの給食は、本校の食育の基盤です。

毎日の給食には、地域の旬の食材を始め、季節によっては秋芳梨、美東ごぼう、厚保栗、にじますといった特産物を積極的に使い、食への関心を高めています。さらに地域の自然のよさや人材に食育を通してふれることにより、地域のすばらしさを感じる時間になりたいと考えています。

本校の特徴的な食育の活動としては、一年を通して秋芳梨の栽培を行う「梨下村塾」があります。土づくりにから収穫・販売までの作業に全校の児童が関わり、収穫した梨は給食でも味わいます。

二年生が行うグリーンピースのさやむきには農家の方に来ていただきます。生産者の思いを知ること、食材を大切に思い、感謝の気持ちを育みたいと考えています。

これまで毎年行っていたさつまいもの栽培は、地域の農業法人やJAの協力を得て、今年度からは隣の保育園と一緒にを行っています。秋には収穫した芋を給食で地域の方と一緒に味わいます。



さつまいもの苗植え

これらは、年間カリキュラムに位置づけることで、担当が変わっても、計画的に実施することができています。また、家庭科の授業とも関連をもたせ、給食の献立を考える学習では、子どもたちに地場産食材を利用することを意識させます。子どもたちが立てた地域の特色ある献立は実際に給食で登場させています。

こうした地域の良さを、しっかりと給食に取り入れ、伝えることにより、栄養教諭として、本校らしい充実した食育にしたいと考えています。給食を核として、地域の食材を知り、地域の人とつながること、子どもたちが出会った「地域の宝」に思いを寄せ、心も体豊かに成長してくれることを願っています。



委員会による児童主体の食育活動

下関市立川中西小学校

栄養教諭 米見田 浩子

本校では、栄養教諭が学級担任・給食主任や家庭科専科・養護教諭等と連携して食に関する指導を実施しています。また、給食委員会児童の主体的な食育啓発活動も多く取り入れています。その一つを紹介します。

本校では、ほとんどの児童は、毎日朝食をとっていますが、「パンだけ」等、簡単に朝食を済ませる児童も多く、食事内容に課題が見られます。そこで、全校児童朝会において、給食・保健・体育委員会の児童が協力し、「早寝・早起き・朝ごはん」や「運動の大切さ」について発表しました。まず、保健委員会が睡眠（早寝・早起き）の大切さについて発表しました。次に、給食委員会が、「朝ごはんを食べると、脳にスイッチ、体にスイッチ、おなかにスイッチが入り、頭がすっきりして勉強が良くなるし、体も動いて元気いっぱいさ。それにおなかの調子もよくなるんだって」と、劇やクイズで全校児童にわかりやすく伝えました。その次に、体育委員会の児童が運動することの大切さについて発表した後、朝ごはんルンバの曲に合わせて、「ごはんやみそ汁、卵焼き、サラダ、スープに果物などバランスの良い朝ごはんを食べると何でもできるパワーになるよ」と、ダンスで表現しました。全校の子ども

たちは、委員会の発表を楽しみながら観ることで、一日のスタートの大切な食事である朝ごはん、早寝早起き、そして運動することの大切さについて意識を高めることができました。子どもたちが心も体も健やかに成長していくためには、バランスの良い食事や、十分な睡眠・運動など、規則正しい生活習慣を身につけられるように、今後も学校・家庭・地域が連携し取り組んでいく必要があります。その中の一つとして、給食委員会の児童による主体的な食育活動の場も広げていきたいと思っています。



給食委員会の発表



「トマトのお話」園児は地域で育つ

周南市立鹿野幼稚園
園長 西村 陽子

晴天に恵まれた六月のある日、鹿野幼稚園の園庭に鹿野保育園と鹿野幼稚園の四・五歳児十八名が集まりました。今日は「トマトのお話」を聞く交流活動の日です。お話をしていた方々は、昨年より新規就農者として鹿野地区大潮でトマトと葉わさびを栽培しておられる方です。地域新年会で初対面にもかかわらず「園児にトマトのお話をしてくださいませんか」という突然のお願いをかなえてくださった方です。鹿野地域には、野菜も子どももすくすく育つ優しい水と風と大地があるからこそ実現したのだと思います。

「トマトはお水がたくさん必要です。お水をたっぷりあげてください。」
「トマトは外国から来た野菜です。」
「トマトが苦手な人も、トマトカレーにしたらおいしいので作ってもらって下さい。」毎日二千四百本のトマトの作業を気温が四十度以上にもなるビニールハウスの中でしておられる方ですが、園児にわかりやすくお話をしてくださりました。「スーパーなどに僕の名前でトマトを出荷しています。見つけて下さいね。」子どもたちは家庭で買い物に出かけた時に思い出すでしょうか。お話しして頂いた方の名前のトマトを見つけれ



「トマトのお話」を熱心に聞く園児たち

るでしょうか。もしかしたら、地域のスーパーでご本人に出会うかもしれません。その時に「あっ、トマトのお話の人！」と思っただしてくれませんか。それだけでも交流活動の意義があったと思います。

これからも出会った人が思い出される地域交流活動を積極的に園教育に取り入れ、地域でつながる事の楽しさや嬉しさを感じられる子どもたちに育って欲しいと願っています。



みんながすこやかに！

社会福祉法人 光善会
大内すこやか保育園
園長 柴田 眞弓

今日も保育のスタートは、楽しい園歌の歌と踊りで始まりました。この程、作詞、工藤直子氏、作曲、新沢としひこ氏に、園歌「なかよしみんな すこやかに」を作っていたとき、永久に歌いつなく、かけがえない財産ができました。この園歌では、大内すこやか保育園の子どもたちの姿を詩で表していただきました。私は新園長として子どもたちとのふれあいにとても親しみと幸せを感じています。

子どもたちが「楽しいねえ」とつぶやいたり、「今日、初めて歩きましたよ」と、初体験の出来事をお母さんと共に喜び合ったりして、子育ての楽しさを感じています。毎日の感動が、温かい心の絆となって幸せが広がっています。

保育目標「すこやかに」と園歌の心のコラボレーションで、永遠にすこやかに成長する子育て保育に、新任園長は今日も奮闘中です。

私は「真心の保育」を行い、令和の時を生きる子どもたちの小さな命を大切に育んで、確かな成長へとつな

♪大内 おひさま こんにちわ♪
すくすくと育ち、お日様が大好きで、元氣ヒンビンです。
♪しっかり考えて 何か発見♪
こころ豊かに「真心」をこめて、らんらん大きく育っています。
♪二人ひとりが 宇宙の中心♪
やる気たっぷり、どの子も宇宙の中心で、キラキラひかり輝いています。
♪元氣だね がんばるね♪
がんばる子どもたちは、個性豊かな素敵な感性を持って「すこやかに」大きく成長しています。



園歌コンサート

音訳十年



下松支部

田中 佳代子

退職後に始めた音訳。視覚障害の方に音声で情報を届けるといふ活動だ。私の所属している会では、広報・市議会日より、社協だよりなどを音訳している。利用者の要望で取扱説明書や俳句雑誌を読んだりもしている。読むというよりも簡単に思われるかもしれないが、「伝わるように読む」のは、なかなか難しい。

読む前には、漢字の読みや語句のアクセントを調べる（調査）。表や写真があれば文章化する。ネット、アクセント辞典を駆使してようやく下読みの段階。修飾語はどこにかかるのか、「」は引用なのか、自分の思いなのか。声色を使わないというのが原則の音訳では会話文も苦勞する。そうして、ようやくマイクの前で録音を始める。読み始めると、また問題。事前にアクセントは調べているけれど、言葉は活用によって変化したり、助詞が付けばアクセントの抑揚がずれたりするなどで、一向に進まない。

三年目からは本を読むことに挑戦してきた。哲学書、翻訳本、時代小説、ビジネス書など。依頼された本や、サビエ図書館（点字や音声データで提供するネットワーク）に挙がっていない本を探して音訳し、これまでに仕上げた本は二十数冊。毎日、自

室にこもつての作業は辛いものだが、出来上がったときの達成感、利用者に喜ばれること、そして自分では決して選ばないだろう本に出会えることが嬉しくて続けてこられたと思う。

古稀を迎えた今は、根気がなくなり、集中力も薄れてきた。加えて滑舌も悪くなってきたので、指導員の資格を生かして指導に当たっている。

会員は六〇代以上の高齢者。教材研究を十分にした後の授業の手ごたえが教員時代の懐かしい思い出だが、今はどんな課題を準備しようかと、新聞や雑誌、書物などに目を凝らす。生き生きと熱心に取り組まれる姿から私も元気をもらっている。日々である。



会員研修での指導

六十一歳からの挑戦



山口支部

山本 幹雄

誰しも年齢が進むにつれて興味関心が変化してくるものだ。この変化に身をまかせて生きる中、私は、若いころから日常で退屈と思ったことはほとんど無い。

退職後、自由な時間が多くなった。家族は、「何をしてもよいが、後始末をよくすること、特に没後処分に困る物は作るな、金のかかることもするな」と言う。条件に合うものを模索し、「竹細工」と決めた。

山へ竹を取りに行く。本、道具を購入した。掃除がし易い軒下で、竹割りから始めた。当初は日用品を作っていたが、そのうち材料も木（山ぶどう）の皮、煤竹（古民家の屋根裏で長い間煙でいぶされた竹）へと変わり、作品も、蟹、昆虫と多彩になってきた。

ある秋の午後、一匹のカマキリが土間の入り口に倒れていた。かすかに動いている。何かを訴えているように感じ、そっと手にのせて眺めた。カマキリの各部位の役目もつ繊細な構造のすばらしさに見惚れた。

これを、できるだけ忠実に作ってみたいと思い、一週間以上かけて二匹を作った。実物にはかなわないが、家族が褒めてくれた。あと二年で米寿というころ、その記念にと思い、カマキリ八十八匹を仕上げた。記念にと写真に撮り、

新聞にも掲載された。あるホテルにも貸し出した。一か月後、次の展示を約束していたので取りに行くと、帰ってきたのは、八十八匹ではなく六十二匹。その中で、健全なのは十五匹。他は重軽傷を負っていた。腹が立った。日数も少なく、材料も不安な中、何とか八十八匹にしたが、気になる作品が多い。代わりに作品の展示をさせていた。ただ、その場をしのいだ。

その後は、今までと変わらず、土日の休みもなく朝八時三十分から夕方まで、ひたすら竹と遊ぶ。材料も少なくなるので、作品を考えながら、命のある限り続けようと思う。



米寿の記念「88匹のカマキリ」



教職時代を偲ぶ



防府支部
西村 直記

流れていたのは

急に開かれた全校集会、抜けたものがないか教室を回る。ふっと目についた掃除機。なぜかふたを開けてみる。タバコとライターが並べて入れている。集会が終わって、そそくさと掃除機のメンテナンスに励む。我クラスの少年。ゆっくりお話をしようか。

校区内を車で流していると、「留守の間にも上がりますよ」と許可をとっていた家で、何やら怪しげな気配が、押し入れの前で、「出てこい」と声をかける。中学生の集団が「アハハ」と笑いながら転げ落ちてくる。さあ君たち、自分の学校へ帰ろうね。

「あんたんとこと、うちのが、今カラオケボックスに入ったと情報が入った。あんたも来るか。」「はい行かせていただきます。SABAのボスからの情報は確かだ。現場に急行する。コンテナを改修したボックスの周りを取り囲み、声をかける。おとなしく出てきなさい。中からうなだれ観念した様子で教人が出てくる。

♪チャラチャラー チャララー あの頃私のバックには、「太陽にほえろ」のテーマ曲が流れていた。

やってきたのは

「心理学を勉強しようと思つて買ったんだけど、読んでから送るね」と、姉が一冊の本を送ってくる。「心の外傷と回復」、訳者は中井久夫とある。

すると、セミナーパークで教育相談の講演会。講師は中井久夫。「えっ！」

話のネタを仕込むため手当たり次第に本を読む。河合隼雄の本は読みやすく、文庫本はほとんど読んだ。そんな時、臨床心理士会の記念講演。講師は河合隼雄。すぐさま下関海峡タワーへと走る。まさに、弟子の準備ができた時、道のかなたから師

がやってくるのであった。

後ろにいるのは

ある日、目にとめたテレビ番組。東南アジアの国で、交渉をするユネスコの若い女性。大臣を相手に粘り強い交渉の末子どもたち全員へのワクチンの接種を獲得する。どこからこの強さは来るのだろうかと思つていて、彼女の言葉に納得。

「私の後ろには子どもたちがいる」。

この言葉は私の根っこになった。私の後ろには子どもたちが、そして彼らに寄り添う教職員がいる。このことを思うとき、強くなれた。引いてはいけないときがある。私が負けるわけにはいかない。

今、私の後ろにいるのは

公益社団法人山口県障害者スポーツ協会、全国障害者スポーツ大会、聞いたことのある方が何人いらつしやるだろう。じつは、四年前まで私も知らなかった。今、私の後ろにいるのは、障害のある一般の人々である。彼らの心の底からの笑顔が私を動かしている。誰もが楽しめるスポーツが、身近で手軽にでき、参加した人たちがみんな笑顔になる。そんな日が早く来ることを願いながら、日々を過ごしている。

どうか皆さん体験しに来てください、そして賛助会員としてサポーターになつていただければこれ以上の幸せはありません。情報はホームページから。



(山口県障害者スポーツ協会)

<http://syospo-yamaguchi.jp>

検索

終身会員の紹介

久保田裕三様(吉敷) 田中 博文様(萩)

お詫びと訂正

六月号で紹介した終身会員の氏名に誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。

宮本 剛様 (誤) 宮本 ↓ (正) 宮本

第一回通常理事会 定時評議員会

5月24日 山口県教育会館
6月7日 山口県教育会館

第一号議案

平成30年度一般財団法人山口県教育会事業報告及び決算について

第二号議案

平成30年度一般財団法人山口県教育会公益目的支出計画実施報告書について

第三号議案

一般財団法人山口県教育会基本財産の組み替えについて

議事

全ての議案について、全会一致で承認をいただきました。

協議では、山口県教育会に期待することとして、会員増募に向けた取組や方策について意見交換されました。さらなる教育会のPRと人々への働きかけの対象の拡大について、貴重なお意見を拝聴することができました。

第一回支部長・事務局長会

6月18日 山口県教育会館

新年度となり、役員交代で新たな支部長・事務局長を迎えた支部もあります。このような中、第一回支部長・事務局長会を開催しました。

報告

(1) 平成30年度山口県教育会事業報告について
(2) 令和元年度山口県教育会事業計画について
(3) 教育県民大会の開催地について
(4) 地区別教育振興フォーラムの開催地について

事務局からの一方的な説明でしたが、新しい支部長・事務局長様には本会の事業についてご理解いただけたのではないかと思います。

協議では、下松、周南郡濃・周南熊毛・宇部の各支部長から、支部の現状と課題、会員増募の取組について紹介いただきました。

